

# 谷崎潤一郎の作品における関西方言の変遷

一卍, 蓼喰ふ虫, 蘆刈, 春琴抄, 夏菊, 猫と庄造と二人のをんな, 細雪一

安井寿枝

## はじめに

谷崎潤一郎は1886年7月24日東京市日本橋に生まれ、1923年まで関東に住むが、同年9月1日に関東大震災に遭遇し、同月27日京都に家を探し避難するかたちで移り住んでいる。そして、その後阪神間を中心に転々とはするも、1954年熱海に正式に転居するまで関西を離れなかった。その間に谷崎は、関西を舞台とする多くの作品を発表しており、それは「卍」に始まり、「細雪」は谷崎の作品の中で最も長い小説となった。

当初谷崎は、自身の作品を関西方言へと翻訳するために助手を雇っていた<sup>1</sup>が、次第に自ら関西方言を使用し小説を書くようになる。よって、そこには関西の出身者ではない谷崎だからこそ、関西方言の変遷が窺えるのではないだろうか。谷崎が作品内で使用する関西方言については多くの論評が存在するが、本稿は従来なされてきたように谷崎が使用する関西方言が正しいか否かにのみ注目するのではなく、まずはその変遷を確認することを第一の目的としたい。

谷崎の作品内に見られる関西方言を一覧としてまとめたものでは和田実(1956)があり、「卍」「蓼喰ふ虫」「蘆刈」「春琴抄」「夏菊」「猫と庄造と二人のをんな」「細雪」「鴨東綺譚」「鍵」の9作品について述べられている<sup>2</sup>。中でも「鴨東綺譚」「鍵」には、和田(1956)に指摘されているとおり関西方言が少ないため、以下では「鴨東綺譚」「鍵」を除く関西在住時代(1923年～

1 高木治江(1977)によれば、「卍」の翻訳には大阪女子専門学校卒業の武市遊亀子氏が雇われたが、結婚したため武市氏の後輩である高木治江氏になったとある。高木氏は1929年3月から翌年の8月まで谷崎家に住み込んでいる。

2 1957年以降の作品では、「夢の浮橋」(1959年発表)や「台所太平記」(1962年-1963年発表)などに関西方言が確認できる。

1954年)に書かれた7作品を扱い、その中心人物の発話文を分析対象とする<sup>3</sup>。

## 1. 「卍」

「卍」は1928年から1929年にかけて『改造』に連載され、1931年4月に改造社から単行本として出版されている。本文は登場人物の柿内園子の語りを、「先生」と呼ばれる作者が聞き書した体裁で書かれ、〈その一〉〈その二〉は発表時、標準語で書かれていたが、〈その三〉から関西方言が徐々に織り込まれ、単行本にする際その全てが関西方言に直されている。柿内園子が語っているのは1928年の事であり(その二)、助手が雇われた時期とほぼ重なる。園子の出身地は明らかではないが<sup>4</sup>、助手である高木治江氏が大阪市の生まれであることを考えると作品内のことばは大阪方言が使用されていると考えられよう。また、園子と恋愛事件を起す徳光光子は船場の羅紗問屋の娘とあり(その一)、大阪方言の中でも船場言葉を使用するといえる。

和田(1956)によれば、「卍」に見られる関西方言は「大阪弁めかすことが出来る単語が無いかわいらしきつぶしに言葉の置換えをやって行ったあとが見えすぎる」と、「筆動きましたら」の助詞「が」を省略していることなどを例にあげ、さらに「へ」「さへ」を一々「い」「さい」で写してあるのも徒らに煩わしい」と述べる。このような訛りは、小谷博泰(1989)にも音韻の上で訛りがきつく感じられると述べられている。「卍」における助詞の省略は前田勇(1977)にも指摘されており、前田(1977)によれば〈その一〉において一番多く省略されているのは「を」であるという<sup>5</sup>。そこで「を」に注目し、園子の発話文に見られる「を」の有無を確認すると、「を」が省略されるのは

3 「蓼喰ふ虫」「夏菊」「猫と庄造と二人のをんな」「細雪」は全て鉤括弧で括られ、地の文とは別に改行されているものを分析対象とする。「卍」は地の文に含まれる鉤括弧で括られた発話文を扱い、「蘆刈」と「春琴抄」には鉤括弧で括られた発話文が少ないため、地の文に見られる登場人物の発話と考えられるものを、間接引用されたものを含めて扱うこととする。

4 現住所は兵庫県西宮市香櫨園とある(その十九)。

5 前田(1977)の調査によれば、第一位「を」第二位「と(言う)」第三位「と(思う)」であり、「を」「と(言う)」が多く省略されるのは市民の会話と一致するが、「と(思う)」の省略が多いのは一致しないと述べられる。

148箇所であるのに対し、「を」が省略されていないのは6箇所であった。

「これは理想やのんですから、別に誰ちふ實在の人間<sup>ゑが</sup>描いた譯ではあれ  
しません。(略) (園子→光子 その二)

「そら、あんたはそんでえ、やろけど、お母さんがきつとわたしを嫌がつ  
てはるわ。(略) (園子→光子 その四)

※「φ」は筆者による挿入。以下同じ。

呼称に注目すると自称詞では、柿内園子と徳光光子は〈その一〉から〈その三〉まで「わたし／私」を使用しており、〈その四〉から「うち」という関西方言の自称詞の使用が見られ、〈その九〉から「あて」が「うち」に混じり使用されている。

「わたし、あんたにこなひだから大變失禮してました。どうぞ悪うに思は  
んといて頂戴」 (光子→園子 その二)

「まあ何云ひなさるのんです。わたしこそ<sup>あやま</sup>詫らないかなんたのんですが」  
(園子→光子 その二)

「うちお腹減つたけど、あんたどうする？」 (園子→光子 その四)

「(略) うちやつたら、戀愛と結婚とは別々のやうに思ふけどなあ」  
(光子→園子 その四)

「(略) 今日はあてがあんた<sup>とこ</sup>所い行くわなあ」 (園子→光子 その八)

「姉ちやんずるいわ、あての裸ばつかり見せてくれ見せてくれ云うて、自  
分のんちつとも見せん癖に」 (光子→園子 その八)

「うち」と「あて」は、牧村史陽編(1955)に関西方言の自称詞としてあげられ、香村菊雄(1986)によれば女性だけが用いる自称詞であることが分かる。「卍」の男性登場人物が使用している自称詞では「僕」があり、園子の夫である孝太郎や光子の恋人である綿貫の例が確認される。話の進行に合わせるように園子と光子の自称詞が変化するのに対し、彼女らの夫または恋人の自称詞は変化していない。その他の登場人物では、光子の女中であるお梅が「わたい」を一例使用しており特徴的である。

「(略) 僕も一遍會うてみたいもんやがなあ」 (孝太郎→園子 その三)

「(略) 僕は僕の立ち場として説明せんらん思ひますので、一往<sup>いちわう</sup>聞いて  
下さいませんか」 (綿貫→園子 その十)

「ほんまに、わたいとこのとうちゃん恐ろしい人だすよつてなあ。(略)」

(お梅→園子 その十)

牧村編(1955)には「わたし」が変化し、「わたい」が生まれたことが示され、園子と光子が使用する「あて」は、「わたい」から「わてい」→「わて」→「あて」と変化したと述べられる。お梅は「わたい」の他に「わたし」を使用しており、女中であるお梅は主人である光子よりも丁寧な自称詞を使用していることが分かる。

対称詞では、園子と光子と綿貫は「あんた」という関西方言を多用し、孝太郎は園子に対しては「お前」、綿貫に対しては「あんた」を使用している。

「この頃はお前も女らしいなつたなあ」 (孝太郎→園子 その一)

「あんた詫りなさることあれしませんわ。(略)」 (光子→園子 その二)

「(略) それにしてもあんたと私とは今日までお付き合いもしてませなんだのに、(略)」 (園子→光子 その二)

「あんたこそうそつきや、巧いこと云うて僕欺してたやないか」

(綿貫→光子 その二十三)

「(略) 家内はあんたがたの戀愛に同情してゝ、(略)」

(孝太郎→綿貫 その二十五)

その他、「いとはん」(その四)や「とうちゃん」(その十)は関西方言でも特に船場言葉であり、名前を呼んでいるものでは「お梅どん」(その九)が同じく関西方言である<sup>6</sup>。香村(1986)によると「女子衆はお松、お竹、お梅がどの家でも女中名になっていて、呼ぶときに「ドン(殿)」がつく」(オノゴシ<sup>ママ</sup>のママ<sup>ママ</sup>)とあり、「お梅」が女中名であることが分かる<sup>7</sup>。

尊敬語では「はる」が最も多く使用されている。その接続に注目すると、「云はる」のような「やはる」が多く、次に「なはる」が多い。「はる」に続き多用されている敬語は、「なさる」であった。

「まあ何云ひなさるのんです。(略)」 (園子→光子 その二)

「(略) あんたは何も知りなされへんのんです(略)」(光子→園子 その二)

6 光子は「どん」をつけず「お梅」と言う(その九)。

7 「台所太平記」には、「今では「お花さん」「お玉さん」と、「さん」づけになりました」とあり、1960年頃の様子が窺える。

「(略) そしたらどないに云やはるかしらん」 (光子→園子 その三)

「それで、光子さんまだみやはんのか」 (孝太郎→園子 その六)

「みやはるけど、もう直<sup>ち</sup>き歸りはるやろ」 (園子→孝太郎 その六)

「(略) ——そんなこと昔から分つてんののに何でそんなもんと結婚しなはつてん? あんた、うちのお父さんに洋行費出して貰ひたうてうち貰ひなはつたん? きつとさうだツしやろ!」 (園子→孝太郎 その八)

「(略) ——だだ捏ねんと早寝なはれ、あした遊んだげるさかいなあ」

(園子→光子 その九)

「なあ、姉ちゃん、あんた今でも怒つてなはんの?」

(光子→園子 その十三)

「(略) ほんまにお姉さん知りやはれしませんのんか?」

(綿貫→園子 その十八)

「(略) 一日も早う結婚しなざるのん祈つてるやうに聞いてましたが」

(孝太郎→綿貫 その二十五)

「(略) 妻たる人が自ら進んでしなざるもんを他人の僕がどないすることも出来ません。(略)」 (綿貫→孝太郎 その二十五)

場面に注目すると、園子が使用する「なはる」は少し乱暴な言葉遣いになったときや命令するとき使用されることが多い。

その他「卍」における特徴的な関西方言の使用は、光子の母親が使用する「おます」や、お梅が使用する「だす」である。榎垣実 (1955) によれば、「おます」や「だす」は船場言葉では決して使われなかったらしく、船場の羅紗問屋の御寮人さんである光子の母親やそこへ仕えるお梅が使用するのには実際にはあり得ないようである。

## 2. 蓼喰ふ虫

「蓼喰ふ虫」は1928年から翌年にかけて『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に連載され、1929年に改造社から単行本化されており、「卍」とほぼ同時期の作品である。中心人物である斯波要・美佐子夫婦は、阪急の豊中に住むも(その二)、生まれは東京であり(その三)関西方言を使用しない。作品内で関西

方言を使用するのは、斯波夫婦の息子である弘と、美佐子の実父の妾である京都生まれのお久（その二）である。弘は標準語と大阪方言を、家と学校で使い分けているとあり（その四）、次のような大阪方言を小父である高夏の前で使用している。

「そらなあ、僕かつて標準語使へ云うたら使はんことないけど、學校やつたら誰かつてみんな大阪辯ばつかりやさかい……………」(弘→高夏 その四)  
弘が大阪方言を使用するのはこの一例のみであり、「卍」同様助詞の省略が多い<sup>8</sup>。一方、お久において助詞「を」の有無を確認すると、省略されているのは17箇所、省略されていないのは2箇所であった。

「何ゆお云やす、わざわざ上つていたゞくほどおいしいことおへんえ」

(お久→美佐子の父 その三)

「ちよつと、此處をきつうに締めとおくれやす」

(お久→美佐子の父 その十)

「(略)先月は八瀬の方まで摘みに行て、路のたうを仰山探つて歸りました」

(お久→要 その十)

お久の自称詞では「わて」「あて」「あたし」、対称詞では「あんた」「あんさん」の使用が見られる。

「かなはんわ、わてエ。……………」

(お久→美佐子の父 その九)

「そないお云やすなら、あんた弾いてお上げやすな」

(お久→美佐子の父 その九)

「けど、お宅のお風呂場みたいにあか明うしたら、あてえ等よう這入りまへん」

(お久→要 その十四)

「あたしも長唄けいこしてみとおす」

(お久→要 その十四)

「(略)……………あんさんとこの奥様みたい綺麗おしたらよろしおすけど。……………」

(お久→要 その十四)

「あんさん」は「あんた」の敬称であり、「卍」では初対面でも「あんた」を使用していたが、「蓼喰ふ虫」では「あんた」と「あんさん」を発話対象によ

8 省略された助詞を補うと次のようになろう。

「そらなあ、僕かつて標準語 を 使へ て 云うたら使はんこと が / は / も ないけど、學校やつたら誰かつてみんな が 大阪辯ばつかりやさかい……………」

って使い分けていることが分かる。

尊敬語に注目すると、「蓼喰ふ虫」のお久は「お～やす」の使用が多い。

「さあ、今度はあんたお唄ひやしたら、……………」

(お久→美佐子の父 その九)

「ちよつと、此處をきつうに締めとおくれやす」

(お久→美佐子の父 その十)

「どうせお泊まりやすのんやろ？」

(お久→要 その十四)

「やす」は中井幸比古(2002)にもあげられるように京都方言である。「蓼喰ふ虫」に見られる「やす」は全て「お～やす」の形で「お」をとるのが特徴であり、実際の京都方言でも「やす」のみでは使わなかったとある(楳垣(1950), 井之口有一・堀井令井知(1992))<sup>9</sup>。このような使用から、和田(1956)には「卍」よりも方言に難が見られないと述べられている。

その他「蓼喰ふ虫」における特徴的な関西方言の使用は、お久が使用する「なあへ」「へえ」「おへん」「おす」「どす」終助詞の「え」である<sup>10</sup>。「おへん」「おす」「どす」終助詞の「え」は京都方言の特徴として楳垣(1950)・和田(1956)・中井(1997)などにあげられている。「なあへ」「へえ」は応答を表す感動詞であるが、京都では「へえ」よりも「はあ」の方が多く使用されていたようである(奥村三雄(1962))。「はあ」ではなく「へえ」がお久の特徴となっている<sup>11</sup>のは、読者に京都らしい印象を与えるためであり、一種の「役割語」(金水敏(2003))になっていよう。

9 同じく京都方言が使用されている「夢の浮橋」にも「お～やす」の使用が確認される。

10 「乱菊物語」(1930年-1934年発表 未完)にも室町時代の京都言葉として、「どす」が使用されている(二人侍その四など)が、香村(1986)によれば、当時の実際の京都方言に「どす」はまだ存在していなかったようである。これは一種の「役割語」(金水敏(2003))といえよう。

11 美佐子からは「何を云はれても「へいへい」云つてゐる魂のないやうな女」(その二)とされる。

### 3. 蘆刈

「蘆刈」は、1932年の11月と12月に『改造』に発表され、翌年に限定版とした『潤一郎自筆本蘆刈』が出版されている。本文は阪急岡本に住む「わたし」の一人称で書かれており、会話文は鉤括弧を用いず地の文に直接引用されている。作品全体にいえば関西方言は少ないが、登場人物が関西出身者である点で先の「蓼喰ふ虫」とは異なる。

作品内で関西方言を使用するのは、「わたし」にお遊さまの話を語り出した男である芹橋、お遊さま、芹橋の父親である芹橋慎之助、お遊さまの妹で芹橋慎之助の妻となるお静である。使用される関西方言は、「卍」や「蓼喰ふ虫」のようなものではなく古めかしい。それは、和田（1956）に述べられるように「ござります」「ござりませぬ」「ならなんだ」「であろうの」「てでござります」「ましようぞ」などから醸し出されるのであろう。お遊さまとお静の助詞「を」の有無に注目すると、作品全体を通して省略された箇所は見つからず、これが「蘆刈」の特徴である。

どうかあの兒を芹橋さんのやうな人と添はしてやりたい

（お遊→芹橋の叔母）

わたしは一生涯うはべだけの妻で結構ですから姉さんを仕合はせにして上げて下さい

（お静→慎之助）

その他、関西方言としてあげられるのは、地の文に「大阪方言」と明記されている「そうかいなあ」「そうでっしゃるなあ」、お静が芹橋に対して使用する「あんさん」である。

### 4. 春琴抄

「春琴抄」は1933年6月に『中央公論』に発表され、同年創元社から単行本化されている。本文は谷崎と思われる作者が、「鴎屋春琴伝」という架空の小冊子を元にしたものとなっており、「卍」や「蘆刈」と同様に発話文は全て地の文に挟まれている。中心人物は、大阪船場道修町の薬種商の娘である鴎屋



春琴（一<sup>12</sup>）と、丁稚を経てその夫となる温井佐助（一）であり、その他名前の分かる人物は、晩年の春琴と佐助に仕えた鳴沢てる（三）と、春琴に三味線を習っていた船場の近くにある土佐堀の雑穀商・美濃屋の息子である利太郎（二十）などがある。これらの登場人物は関西方言を使用しており、鴎屋が船場にあることから特に春琴と佐助の発話には船場言葉が意識されていると考えられる。

発話文全体を通しては、先の「蘆刈」と同様「ござります」「ござりませぬ」が使用されており、古めかしさが漂う。また、助詞「を」の有無を春琴の発話文において確認すると、省略されている箇所は3箇所であり、省略されていないのは43箇所と省略が少ないことが分かる。

「誰よりもおとなしゆうていらんことゆ云へへんよつて」

（春琴→奉公人 五）

藝道に精進せんとならば痛さ骨身にこたへるとも齒を喰ひしばつて堪へ忍ぶがよいそれが出来ないなら私も師匠を断ります（春琴→佐助 十一）  
佐助どん何ぞ疑ぐられるやうなことゆ云うたんと違うかわてが迷惑するよつて身に覚えのないことはないとはつきり明りを立て、ほしい

（春琴→佐助 十二）

自称詞に注目すると、春琴は「自分」「わたし／私」「わて」「妾」、佐助は「わし」「自分」「わたくし／私」、てるは「私」、利太郎は「わい」である。

自分のほんたうの天分は舞にあつた。わたしの琴や三味線を褒める人があ  
るのはわたしといふものを知らないからだ（春琴→佐助 三）

自分の技は遠く春琴に及ばずと爲し（佐助→不明 七）

「佐助、わてそんなこと教せたか」（春琴→佐助 九）

妾とても召使を勞はる道を知らざるにあらず（春琴→佐助 十五）

わいが附いて行つたげる（利太郎→春琴 二十）

私もさう思ふやうにしてをりました（てる→わたし 二十二）

ほんに私は<sup>わたくし</sup>不仕合はせどころか此の上もなく仕合はせてござり升

（佐助→春琴 二十四）

12 「春琴抄」には章ごとの番号は振られていないが、便宜上章番号を明記する。

「春琴抄」の特徴的な自称詞は、春琴の使用する「妾」、佐助の使用する「わし」、利太郎の使用する「わい」である。「妾」は実際に船場で使用されていたとは考えられにくい、「ござります」などと同様古めかしさを表しているのであろう。「わし」「わい」は、牧村編（1955）にあるように大阪において男性用の自称詞である。先の作品では、登場人物ごとに自称詞が使い分けられることがなかったが、「春琴抄」においては登場人物ごとに自称詞を使い分け、さらに場面によっても使い分けられていることが分かる。

対称詞では、春琴が使用する「汝」、利太郎が使用する「お師匠はん」、春琴の両親が使用する「そなた」が特徴的な使用としてあげられる。

そなたが佐助に教へてやる親切は結構だけれども（両親→春琴 十一）

汝が齒を病んでゐるらしきは大方晝間の様子にても知れたり

（春琴→佐助 十五）

お師匠はん、お師匠はんのお許しが出な佐助どん飲みやはれしまへん

（利太郎→春琴 二十）

「汝」や「そなた」は、やはり古めかしさを表現していると考えられる<sup>13</sup>。「お師匠はん」に使用される「～はん」は、「～さん」の大阪方言である（牧村（1955））。この「～はん」は船場では使用することが少なかったとあり（前田（1977）、香村（1986））、佐助やてるが「～はん」を決して使用しないことから、これらの違いは船場と土佐堀という地域的な差と、人物的特徴を表しているといえよう。さらに作品内で使用されている「こいさん」は、船場特有のことばであり、この頃から谷崎は船場言葉を意識し始めていることが分かる。しかし、和田（1956）や三島佑一（2003）が指摘するように、末娘を表す「こいさん」を末娘ではない春琴に使用していることは、谷崎が使用する関西方言の大きな特徴として注意が必要であろう<sup>14</sup>。

尊敬語では、「お／ご～なさる」が最も多く、次に「はる」「なはる」の使用が見られる。また、「れる／られる」や「お／ご～になる」などの標準語の使用も関西方言の発話文に混じり見られる。

13 船場言葉の手本は京都にあるようだ（榎垣（1955））が、近世上方において「妾」「汝」の例は見られない（寺島浩子（1976・1982））。「そなた」は寺島（1982）に述べられるように、京都においては女性がよく用いたようである。

14 谷崎の使用する「こいさん」については、詳しく安井寿枝（2006）に述べている。

- 手ほどきをしてお貰ひなされそれからずつと稽古を勵んでをられました  
 (てる→わたし 三)
- 何卒何處へなとお遣りなされて下さりませ (春琴→両親 十二)
- 手をお洗ひになつたことがなかつた (てる→わたし 十四)
- 佐助どんあんたも疲れはつたやろ (利太郎→佐助 二十)
- 「覚えてなはれ」 (利太郎→春琴 二十)
- 御安心なされませ (佐助→春琴 二十三)

「なさる」は「卍」にも見られる尊敬語であるが、「お／ご～なさる」という古い形が主として使用されているのは、舞台となる時代が明治初期であり「卍」よりも古いからであろう<sup>15</sup>。また、尊敬語においても登場人物によって使用に偏りが見られ、佐助やてるは「お／ご～なさる」を最も多く使用し、利太郎は「はる」や「なはる」を使用する。これは、佐助やてるが待遇する人物が春琴であることに関係があると考えられ、例えば、鴉屋の女中は春琴に対し「はる」を使用している(十一)。このように、高い敬意を表す「お／ご～なさる」を佐助やてるが使用するのは、彼等が春琴を非常に高く待遇していたことを表し、特に佐助が春琴を崇拝する様子が印象づけられる。

## 5. 夏菊

「夏菊」は1934年の8月と9月に『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に連載されるも、モデルと考えられた根津家<sup>16</sup>からの申し出により中止され、未完のままに終わっている。中心人物は大阪の旧家の主人・有川敬助とその妻・汲子であり(その一の五)、その他の登場人物は敬助と汲子の息子・由太郎と、敬助の妹である由良子、奉公人の鶴七、女中のお篠である。これら全ての登場人物は、関西方言を使用している。汲子の発話は少ないため、汲子と由良子の発話文に見られる助詞「を」の有無に注目すると、省略されている箇所、省略されていない箇所とも6箇所であった。

15 近世上方における「お～なさる」から「なさる」への変遷は、村上謙(2005)に詳しく述べられる。

16 谷崎の三人目の妻である松子夫人が初めに嫁いだ家。松子夫人は1934年4月に根津姓から旧姓森田姓に復帰し、翌年1月谷崎との結婚式をあげている。

「あんさん氣イゆ廻し過ぎてはるねんやろ。」（汲子→敬助 その一の四）

「けど、今の場合、家を二軒も借つたら、世間からどない云はれるやら。」

（汲子→敬助 その一の七）

「そしたら、此れを持つて行つて、………」（汲子→鶴七 その三の三）

「(略)——兄さんは間違うてるけど、あんたを憎むことはあれへんがな。  
同情してはるわ。」（由良子→鶴七 その三の五）

「(略) それゆ考へたら、あんた云ふもんは姉ちやんにかて必要やねんで。」

（由良子→鶴七 その三の六）

「あのなあ、わて、買ひ物を頼んでゝん。」（由良子→敬助 その三の六）

同じ大阪方言を扱ったものでも「蘆刈」「春琴抄」では「を」の省略が少なく、「夏菊」において再び増えたのは作品の時代が異なるからであろう。また、「卍」では先行研究に指摘されるとおり至る所に助詞の省略が見られたが、「夏菊」では「卍」のように全てを省略しようとする姿勢は見られず、「を」を確認する限りその省略が半数であることは助詞の省略を控えようとした現れなのかもしれない。さらに「卍」では「へ」「さえ」のほとんどが「い」「さい」に変更されていたが、「夏菊」ではその変更はほとんど見られない。和田（1956）では「夏菊の潤一郎がすでに細雪の潤一郎と同程度に大阪弁を駆使する力を得ていた」と述べられており、谷崎の関西方言がここで大方完成していたといえよう。

自称詞では、汲子・由良子・お篠の女性登場人物が「わて」、敬助・鶴七の男性登場人物が「僕」を使用している。また、鶴七は敬助に対しては「私」、由良子に対しては「僕」と使い分けており、主従関係が窺える。

「わて、一遍由良子ちゃんに聞いてみたら悪いか知らん。」

（汲子→敬助 その一の四）

「(略) 由良子の方がモーションをかけてるんだと、僕は見てる。」

（敬助→汲子 その一の四）

「………私のためにそない迄心配して頂きましたら、(略)」

（鶴七→敬助 その二の三）

「わての云ふ通りにしたらえゝねん、(略)」（由良子→鶴七 その三の五）

「僕、正直のところ、僕みたいなもん此處の家庭へ置いたらあかん思うて

はるのんやつたら、(略) (鶴七→由良子 その三の五)

「(略) 何でわてがあない云はれんならんやろ。」

(お篠→鶴七 その四の八)

対称詞では、汲子が敬助に対して「あんさん」、由良子が鶴七に対して「あんた」、敬助が汲子に対して「あんた」、由太郎・鶴七・お篠に対して「お前」、鶴七が汲子に対して「御寮んさん」、由良子に対して「とうさん」、お篠に対して「お篠どん」「あんた」を使用している。

「あんた、何してるのんや」 (敬助→汲子 その一の四)

「あんさん氣イ廻し過ぎてはるねんやろ。」 (汲子→敬助 その一の四)

「お前、又居睡りしてたんやろ。」 (敬助→鶴七 その二の一)

「御寮んさん」 (鶴七→汲子 その三の一)

「とうさん、そこ、鐵條網がありまつせ」 (鶴七→由良子 その三の四)

「あんたのお母さん、隣りへ來やはるのんと違ふ？」

(由良子→鶴七 その三の四)

「お前、飲まんところを見ると、これが變つたことを知つてたんやろ。(略)」

(敬助→由太郎 その四の二)

「なあ、お前、僕等を馬鹿にしてるのんやろ？」(敬助→お篠 その四の四)

「(略) お篠どん、あんたに怒つてはるのんやないねん。」

(鶴七→お篠 その四の八)

これらの使用から、「あんた」は同等の者または下位者に対して最も多く使用され、それに対し「あんさん」は上位者にのみ、「お前」は下位者に対してのみ使用されていることが分かる。

尊敬語では「はる」の使用が最も多く、「卍」と異なる点は「なはる」の使用が少ない点である。また、鶴七は敬助や汲子には標準語の尊敬語を使用し、由良子には「はる」を使用している。

「(略) 二階も全部お使ひになつたら。」 (鶴七→敬助 その二の四)

「お買ひになりました時のお値段云うて頂きましたら。」

(鶴七→汲子 その三の三)

「そないせえ云やはりますねんけど、とうさん、誰に聞きはりましてん？」

(鶴七→由良子 その三の四)

「姉ちゃん、何も云やはれへなんだ？」 (由良子→鶴七 その三の五)

「(略) ほんまに拂うてくれはつたことあるかいな。晦日になつたらいつかで知らん顔してはつて、御寮さんが出しやはるのんやないか。」

(お篠→鶴七 その四の八)

鶴七が標準語の尊敬語と、「はる」を使い分けているのは、敬助の対称詞と同様主従関係によるものであろう。和田(1956)に述べられるように、「夏菊」ではこのような位相による関西方言の使い分けが見られることが特徴である。

## 6. 猫と庄造と二人のをんな

「猫と庄造と二人のをんな」は1936年の1月と7月『改造』に発表され、翌年創元社から単行本化されている。中心人物は、石井庄造とその現在の妻・福子と、前妻の品子である。庄造は兵庫県芦屋生まれであり(四<sup>17</sup>)、福子は庄造の従兄弟で芦屋より少し東にある今津生まれである(四)。品子は山芦屋に奉公に出ており(四)、生まれは定かではないが阪神間と思われる。福子の発話に見られる助詞「を」の有無を確認すると、「を」が省略されるのは35箇所、省略されずに用いられているのは作品全体でも3箇所のみであり、「を」の省略が他の作品に比べ多いことが分かる。

「あんた、その猫ゆ品子さんに譲つたげなさい。」 (福子→庄造 二)

「(略) 明日塚本さんゆ呼んで、早よ渡してしまひなさい。」

(品子→庄造 二)

「(略) いつたいお母さん、あの人とゲルになつて、わてを欺すやうなことゆして、濟むと思うたはりまんのか。」 (福子→庄造の母 十一)

「(略) 今度はわてを追ひ出す相談してなはるねん。」

(福子→庄造の母 十一)

自称詞では、庄造が「僕」と「自分」、福子と品子が「わて」を使用しており、先の「夏菊」と類似する。

「わてちやんと數へてゝん。(略)」 (福子→庄造 二)

17 「猫と庄造と二人のをんな」には章ごとの番号が振られてはいないが、便宜上本稿では章ごとに番号を明記する。

「そんなことあれへん、僕、いつかて自分が食べよう思うて頼むねんけど、  
(略)」 (庄造→福子 二)

「リ、ーや、お前けふからわての猫になつたんやで。(略)」  
(品子→庄造 六)

対称詞では、庄造が「お前」と「君」、福子が「あんた」と「自分」、品子が「お前」を使用している。

「あんた、その猫品子さんに譲つたげなさい。」 (福子→庄造 二)

「(略) 何ぞお前、氣に觸つたことあるのんか。」 (庄造→福子 二)

「(略) そない云うといて、自分ちよつとも食べんとおいといてからに、猫にばつかり遣つてもて、……………」 (福子→庄造 二)

「お前、何でそない表ばかり見てんのん? (略)」 (品子→猫 六)

「さうだんが。——君あの時に、品子があれを可愛がるかどうか、(略)」  
(庄造→塚本 九)

先述の作品に見られない対称詞は、庄造が使用する「君」と、福子が使用する「自分」である。「君」は1952年に発行された国語審議会の「これからの敬語」に標準語の対称詞としてあげられており、関西方言とはいえない。その使用を見ると、「お前」は福子に対して、「君」は友人である塚本に対して使用されていることから、「お前」は妻に対する対称詞、「君」は男性の友人に対する対称詞であることが分かる<sup>18</sup>。「自分」は関西方言において相手を指す語となるが、作品の時代である1934年頃に広く使用されていたかは不明である<sup>19</sup>。また、現在の対称詞となる「自分」は「あなた」の意味で使用されているが、福子が使用している「自分」は「あなた」に加え「自分自身で」の意味も含まれており、現在の対称詞「自分」よりも限定したものといえよう。その他、女性である品子が「お前」を使用する例は先の作品に見られなかったが、対象が猫であることから動物には「お前」を男女ともに使わせていることが分かる。

尊敬語では「なはる」が最も多く使用されており、「はる」が数カ所使用さ

18 飛田良文(1981)には明治10年代の書生言葉として「僕」「君」「○○君」が示されるが、庄造が使用することばも同じである。これは、書生言葉の名残とも考えられる。

19 牧村(1955)には項目がないが、田原広史(1997)には項目があり高年層も使用すると述べられる。

れている程度である。

「あんた、あの鱈、みんな猫に食べさせなはつたやろ？」

(福子→庄造 二)

「お母さん知つてなはつたんか。」

(庄造→庄造の母 三)

「なあ、お母さん、何で今日までそれ隠してはりましてん。……………」

(福子→庄造の母 十一)

「猫と庄造と二人のをんな」における「なはる」の使用は、小谷（1989）にも触れられており、本作品の第一の特徴とされる。鎌田良二（1979）によれば、神戸では「なはる」は命令の形でしか使用されなかったとあり、「猫と庄造と二人のをんな」では「なはる」の命令の形が多用されている。作品の舞台である芦屋は和田（1956）にも述べられるように大阪方言よりも神戸方言が使用される場所であり、谷崎は大阪との違いとして「なはる」を多用したのではないだろうか。しかし、命令以外でも「なはる」を多用してしまったために、和田（1956）が指摘するように神戸方言らしさがなくなってしまったといえる。

## 7. 細雪

「細雪」は1943年の1月と3月『中央公論』に発表するも時局にそぐわないとして中断され、その後上巻が1944年7月私家版として出版されている。その後1946年中央公論社から上巻を単行本として出版し、翌年同じく中央公論社から中巻を単行本化し、下巻を『婦人公論』に連載した後1948年に単行本化し完成する。執筆に6年をも費やしたこの作品は、源氏物語訳を除くと谷崎の作品の中で最も長いものとなった。中心人物は、大阪船場の旧家・蒔岡家の四姉妹とその家族である（上巻・二）。本稿では、最も発話数の多い四姉妹の次女・幸子と、その夫である貞之助、娘の悦子を分析対象とする。

幸子の発話に見られる助詞「を」の有無に注目すると、上巻のみで省略されている箇所が59箇所であるのに対し、省略されていない箇所は37箇所であった。

「月給が百七八十圓、ボーナスφ入れて二百五十圓ぐらひになるねん」

(幸子→妙子 上巻・一)

「そんな會社の名φ、<sup>あたし</sup>私は聞いたことあれへなんだ。(略)」



(幸子→妙子 上巻・一)

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持つて行かはずん。

(略)

(幸子→妙子 上巻・一)

自称詞では幸子が「あたし／私」「わたし／私」「わたくし／私」「お母ちゃん」、  
貞之助が「僕」「わたし」「わたくし」、悦子が「悦子」を使用している。

「そやつた、あたし『B足らん』やねん。(略)」(幸子→妙子 上巻・一)

「歸らなんだら悦子怒るよ、えゝか姉ちやん」(悦子→雪子 上巻・六)

「今日はお母ちゃんと姉ちやんと、(略)」(幸子→悦子 上巻・九)

「(略) ——僕、雨やつたら洋服にするわ。(略)」

(貞之助→幸子 上巻・十)

「——わたし、電車の中でコンパクトを開けて、(略)」

(幸子→井谷 上巻・十一)

「……わたし達、何かミステークしてゐると違ひますか」

(貞之助→カタリナ 上巻・十七)

「失禮ながら、わたくしは此處の家へはめつたに來たことはないんですが、

(略)

(貞之助→丹生夫人 下巻・十四)

「(略) それで私<sup>わたくし</sup>たちも、どうなさるのか知らん、(略)」

(幸子→御牧 下巻・三十)

場面を確認すると、幸子と貞之助は発話対象との関係がウチの関係であるか、ソトの関係であるかに応じて自称詞を明確に使い分けていることが分かる。親しい人物に対して幸子は「あたし」貞之助は「僕」を使用し、親しくない人物に対しては幸子・貞之助ともに「わたし」「わたくし」を使用している。また、幸子は自らの子供に対して自称詞に「お母ちゃん」を使用していることや、悦子が自称詞に自分の名前を用いていることから、日本の家庭における自称詞の特徴が窺える<sup>20</sup>。

対称詞では、幸子が「あんた」「あんさん」「あなた」、貞之助が「お前」「あなた」を発話対象に応じて使い分けている例が確認される。

20 家族内の呼称については、鈴木孝夫(1973)が参考とされる。鈴木(1973)では、1970年前後の家族内の呼称を扱っているが、「細雪」の時代である1936～1941年においてもこのような使用は存在したと考えられよう。

「(略) ……しかし僕にはあなたの御親切なお心持がよく分つてゐますので、(略)」 (貞之助→井谷 上巻・十)

「(略) あんさんとこまで聞えしませんねん」 (幸子→貞之助 上巻・十)

「(略) ——あんたは兎に角、何も持たんと話だけして來なさい。(略)」 (幸子→貞之助 上巻・十四)

「お前はえ、役にばかり廻りよる」 (貞之助→幸子 上巻・十四)

「あなたの旦那さん、きつときつと無事でお歸りになりますわ(略)」 (幸子→シュトルツ夫人 中巻・四)

幸子は夫または下位者に対しては「あんた」を使用し、ソトの関係の人物に対しては「あなた」を使用している。また、夫に対して使用する「あんた」は、見合いの場などでは「あんさん」として敬称が使用されている。貞之助は妻に対しては「お前」を使用し、ソトの関係の人物に対しては幸子と同じく「あなた」を使用している。その他、「春琴抄」にも使用が確認された「こいさん」が、四姉妹の末の妹・妙子に対して使用されていることも特徴としてあげられる。

尊敬語では、幸子が「はる」と「なさる」を呼称と同様使い分けていることが確認される。

「(略) 女學校時分に今井云うてはつた——」 (幸子→雪子 上巻・十八)

「——今朝は珈琲が特別強う匂うて來るやうに思ひなされへん？」 (幸子→貞之助 上巻・二十三)

「はる」は「細雪」内で最も多く使用されている尊敬語であり、「なさる」は夫である貞之助に対して使用されている<sup>21</sup>。また、見合いの場では標準語の尊敬語が使用されており、会話文が標準語であることは先述の作品には見られない特徴である。また「やす」も使用しており、「蓼喰ふ虫」のお久のような「お～やす」と「お」をとらないことが注目される。

「……雪子はをりやつけど、呼んで來まおか」 (幸子→富永の叔母 上巻・二十二)

この使用は、前田(1977)に「「お」のない「やす」言葉であって、これこそ

21 「細雪」における「なさる」の使用は、小谷(1989)に指摘されている。

船場特有のもの」と述べられる。

その他、「細雪」における関西方言の特徴では、四姉妹の叔母にあたる富永の叔母が使用する「昔ながら船場言葉」（上巻・二十二）があげられる。

「今日は雪子ちゃんもこいさんもお内にゐてやおまへんか」

（富永の叔母→幸子 上巻・二十二）

「さうですか、それであたしも使に來た甲斐がごわしたわ」

（富永の叔母→幸子 上巻・二十二）

この場面に使用される船場言葉について、榎垣（1955）は「これだけの簡単な対話に船場言葉の代表的語法がこれだけ現れていることは、たしかに注目すべきことであって、谷崎氏は確かな資料に基いて書かれたものと信じてよからう」と述べており、谷崎の関西方言が相当なものであることが示される。

## まとめ

以上、1923年～1954年にかけて7作品における谷崎の関西方言を確認してきたが、最後にその変遷を確認したい。

助詞「を」の省略では、昭和初期を舞台とした「卍」「蓼喰ふ虫」「猫と庄造と二人のをんな」においては省略が多く、「春琴抄」では省略が非常に少ないという結果であった。また、「蘆刈」では「を」が省略された例は見られず、明治初期を舞台とした「蘆刈」や「春琴抄」では、語りのテンポを遅くするために助詞の省略が行われなかったと考えられる。また、「卍」「蓼喰ふ虫」「猫と庄造と二人のをんな」と同時代である、昭和初期を舞台とした「夏菊」「細雪」では「を」の省略が半数ほどにとどまったため、助詞の省略についてはさらに考察を要する。

呼称では、「卍」においては作品の進行に応じて中心人物の自称詞が変化しており、関西方言を表現として駆使しようとした様子が窺えるが、対称詞の使い分けは見られなかった。その後、「蓼喰ふ虫」では発話対象に応じて「あんた」と「あんさん」を使い分け、「夏菊」においては上位者・同等の者・下位者という上下関係が対称詞の使い分けの意識に加わり、「細雪」において上下関係とウチとソトの関係が含まれた、非常に明確な使い分けが行われていたことが

示された。

尊敬語では、7作品を通して「はる」が多く使用されていたが、「蓼喰ふ虫」では「お～やす」を使用し京都らしさを表現していた。「猫と庄造と二人のをんな」では「なはる」を多用することにより「卍」や「夏菊」との差違を図り、「細雪」においては大阪の船場独特の関西方言として「お」を冠さない「やす」を使用するなど、関西方言を場面に応じて巧みに使用していることが窺えた。

大阪方言で書かれた「卍」と同時期に「蓼喰ふ虫」で京都方言を使用していることは、谷崎が関西方言の中でも大阪方言と京都方言の違いを関西移住の5年ほどに感じ取っていたことが示されるであろう。また、京都には半年ほどしか住んでいなかったにも関わらず、「蓼喰ふ虫」では京都方言の特徴を明確に捕らえており、関西移住以前から京都方言には精通していたと思わせる。その後、1927年に松子夫人と出会ってからは、京都方言に似た船場言葉に注目し、6年後の「春琴抄」では船場言葉を作品内に登場させている<sup>22</sup>。また、1934年には『文章読本』を発表しており、ことばそのものに重きをおいていたことが窺え、その結果「細雪」において、発話者・発話対象・登場人物の関係・場面に応じて明確な使い分けが行われ、ここに谷崎潤一郎の関西方言が表現として完成したといえよう。

※ 本稿で谷崎の作品および随筆などを引用するにあたっては、中央公論社発行『谷崎潤一郎全集』（1966年—1968年初版）を使用した。また、ルビや傍点は原文のままに記し、繰り返しを表す「〈 〉」「《 》」は、横書きでの表記が定まっていないため繰り返しされる部分を書き起している。なお、下線は本稿筆者による。

## 引用文献

井之口有一・堀井令井知（1992）『京ことば辞典』東京堂出版

22 「夢の浮橋」には「ほんさん（坊や）」「あかへん（あかん）」などの関西方言や終助詞「え」などの京都方言の特徴と思われる部分が多数あり、晩年の谷崎の関西方言として注目すべき点がある。「夢の浮橋」の時代は大正末～昭和初期であり、舞台は京都である。

- 榎垣実（1950）「京都方言」『国語学4』武蔵野書院
- （1955）『船場言葉』近畿方言学会
- 奥村三雄（1962）「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 鎌田良二（1979）『兵庫県方言文法の研究』桜楓社
- 香村菊雄（1986）『定本船場ものがたり』創元社
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 国語審議会（1952）「これからの敬語」文部省
- 小谷博泰（1989）「神戸の文学と関西方言—谷崎潤一郎、野坂昭如、田辺聖子、宮本輝、坂本遼、その他—」『甲南大學紀要72』甲南大学
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店
- 高木治江（1977）『谷崎家の思い出』構想社
- 田原広史（1997）「生活の中のことば」『大阪府のことば』明治書院
- 寺島浩子（1976）「近世後期上方語の待遇表現—動詞にかかわる上方特有の表現法—」『橘女子大学研究紀要4』橘女子大学
- （1982）「『京言葉』記述の試み—記述の方法、及び人称代名詞に関する記述—」『橘女子大学研究紀要10』橘女子大学
- 中井幸比古（1997）「総論」『京都府のことば』明治書院
- （2002）『京都府方言事典』和泉書院
- 飛田良文（1981）「書生の敬語」『国文学 解釈と教材の研究26（2）』學燈社
- 前田勇（1977）『大阪弁』朝日新聞社
- 牧村史陽編（1955）『大阪方言辞典』杉本書店
- 三島佑一（2003）『谷崎潤一郎と大阪』和泉書院
- 村上謙（2005）「近世上方における補助動詞ナサルの変遷」『国語国文74（2）』京都大学文学部
- 安井寿枝（2006）「『細雪』四姉妹の対称詞—その使用に見る谷崎の表現意図—」『表現研究84』表現学会
- 和田実（1956）「谷崎潤一郎の作品の関西弁」『言語生活61』筑摩書房